

姫丸

抜魔忍





霜月姫丸

Shimotuki Himemaru

学生的身でありながら凄腕の祓魔忍。
教会に召集され、シスターとして地下水路
に蔓延る淫魔を狩る日々を送る。
おっぱいが頭くらい大ききで、お尻と脚も
太いがニンジャなのでとても素早い。
今回散々犯られてしまったが、仲間に救出
される。しばらくは日常生活中に発情してし
まい大変だったらしい。

夜の闇よりなおも濃い、陽の光など無縁の地下道。

蔓延る人外外道の淫魔魍魎を、音もなく狩る少女が一人。

「はっ！ まるで相手にならないわね……お前ら雑魚が何匹集まろうと、あたしの忍術の敵じやないのよ！」

不遜、傲岸、気丈不敵。

端正な美貌ににやりと笑みを浮かべ、少女は刃の手応えに感じ入る。

若き身空の美少女など、淫魔にとつては格好の餌食。それが自ら進んで、このような場所になった一人で赴く。それもおかしな話だが、少女の纏う装束は、それ以上に奇矯なものだった。

見るからに我儘盛りの豊満ボディにぴっちり吸い付く、ラバー質な密着スーツ。艶めかしい光沢が女体の曲線美をいっそう誇張し、なんともフェティッシュな魅力を醸し出している。牝豹のごとき見事な美脚は艶やかなタイツに太ももまでを包まれ、鍛え抜かれた脚線美をこれでもかと見せつけている。

悩殺的なボディラインの裸体さながらに見せつける密着スーツは、装着者の動作をまったく阻害しない極薄の作り。その機能性、そして特異なデザインは、彼女の特異な専職を如実に現すものだった。



「ハッ！　なうにが悪魔よ、あたしの忍術の敵じゃないってーの！」
参。斬。惨。

おぞましき魔物の巢窟、闇の中で舞う少女が一人。
振るうは魔界の闇よりなお濃い、影を纏う忍の一刃。

「で？　これでもう終わりなワケ？　このあたしがわざわざ足を運んでやったっていうのに……拍子抜けもいいところね！」

瞬殺無音、疾風殺迅。恐るべき技の冴えで魔物どもを斬り倒した少女は、くるくると短刀を弄びながら得意げに吐き捨てた。

西暦2×××年——人心の腐敗は留まることを知らず、それを糧とする魔的存在の跳梁はもはや止めようもない。破滅的とも言える魔的災害の拡大を前に、多くの退魔組織は、その有り様を変えざるを得なかった。

世界最大の退魔組織の一つである『教会』も例外ではない。その最大の存在意義であつたはずの信仰さえ問わず、エージェントに求めるのは魔を滅ぼすための「力」のみ。

彼女——霜月姫丸も、そうして『教会』に見出され、その「力」を貸すことを選んだ「シスター」の一人だ。

彼女の「力」は古より連綿と続く、歴史の影で培われた闇の絶技——忍術。若くして霜月流忍術を皆伝した姫丸は、これまでも様々な影の忍務をこなしてきた。闇に生きるプロフェッショナルにとつて、その技を振るう対象が人であろうがなかろうが、そのような事は詮無き事。むしろ誇りとも言える自らの忍術が魔的存在にも通じるのか、実戦で好きなだけ試せるのは愉悦ですらあつた。

そんな若さゆえの不遜も、しかし実際の戦果の前では問題ではない。

『教会』は信仰も出自も人徳も問わず、ただ力のみを評価する。

そして忍びは、自らの腕を買ってくれる者にその刃を託す。

要は今までと変わらない。これこそが忍者の在り方——ただ斬る相手が、人から魔物に変わったただけなのだ。

「いい時代に生まれたもんだわ。仕事には困らないし、バケモノ相手なら好きなだけ技を試せるし。まあ……この格好だけはアレだけど……

……

新たな獲物を求め、より深部へと足を進める姫丸。異界化した周囲はまるで生物の体内のような様相を呈しており、粘液まみれの肉部屋内部には濃厚な淫気が充満している。

いかなる霊能者であっても、魔界の淫気の影響から逃れることは出来ない。それを軽減するために教会から支給されたスーツは、装着者の特性や技能に合わせたカスタムが施されているものの、着慣れた忍装束とはやはり勝手が違う代物だ。

「一応はシスターって扱いなのよね。でも……ねえ……」

教会の権威を示す、聖職者らしい意匠の施された神聖華美なコスチューム。忍者としての特性を活かす構成にはなっているものの、やはり影の存在としては気恥ずかしい華麗さだ。聖別された生地は確かに邪気への抵抗力はあるのだろうが、ラバー質な裏生地のフィット感なんともフェティッシュで、その違和感には隠忍としての集中力を若干削がれてしまう。

そして、そんな僅かな間隙が、戦場では生死を分かつ。

普段の姫丸ならすぐにでも気づいていたであろう。なにせ無音無角の奇襲など、忍者の専らとするところなのだから。だが——

「ッ!?　な、何……え、ええっ!?」

がぼっ！　床から伸び出した巨大な筒状の肉塊が、姫丸を頭から呑み込んだ。そのまま凄まじい力で吸引され、少女は肉口の中へと引きずり込まれてしまう。

「な、何っ……ん、んんっ!?　いや、は、離しなさ……んぐうう、んつううううううううう!?」

巨大な口腔に、頭から肩口、いや腰元までが一気に呑み込まれた。残された両足を惨めにバタつかせる姫丸だったが、もはや趨勢は決定的だ。

狭隘な肉袋の中ではまったく身動きは取れず、それどころか内腔に生え揃った無数の触手に全身を愛撫され、意識を集中する事さえできはしない。さらには大量の媚薬粘液と高濃度の淫気を擦り込まれ、身



も心も一気に発情させられてしまう。

「うああっ、い、いや……やめなさい！ このっ、あ、あたしにこんな真似してただで済むと……うああ、あ、あああつっ！」

じゅるっ、ずる、じゅるっ！ 拒絶の言葉を嘲笑うように、一気に吸引が加速する。ついに姫丸は頭から足先に至るまで丸呑みにされ、巨大な肉袋の内部に取り込まれてしまった。

（く……油断したわ！ このあたしが、な、なんて無様な……！）

一瞬の油断が招いてしまった無様な状況に、自信家の少女は悔しげに歯噛みした。だが、そんな高潔なプライドが翫られるのは、これらが本番——なにせ彼女を取り込んだのは、女を翫り辱め貶すのが専らの、淫らなる魔物なのだから。

「くうっ……こ、この！ こんな、すぐに抜け出して……うあ、あああつ！」

ぐじゃ、ぬちゃっ、にちやああっ！ 狭隘な肉袋が蠢き、少女の全身を揉み潰すようにして蠕動する。さらには野太い肉舌を思わせる触手が大量に伸び出し、獲物の媚肉を隅々まで味わおうと這い回った。

「くっ……ふ、ううっ！ や、やめてよ……気持ち悪い！ やっ、そんなところ……舐めるな……ああっ！」

肉肌に隙間なく張り付くほどの極薄密着スーツだ。鍛え上げられたくノ一の見事なスタイルは、生地越してもはつきりと見て取れる。ラバー質な光沢に白濁粘液のヌメリが加わったボディラインは、むしろ裸体よりも遥かに蠱惑的。そんなフェティッシュな魅力に満ち満ちた女体は、淫魔にとって垂涎的なのだ。

密着スーツをむつちりと持ち上げ、溢れんばかりの量感を示す乳房へと、唾液まみれの肉舌が絡みつく。さらにはスーツ越しに乙女の割れ目さえ浮かべているクロッチへも、野太い舌が先端を押し込んできた。

「やつ……いや、やめなさい！ い、いきなりそんな……ふああ、は、激しい……いいっ！」

見るからに生意気そうな盛り上がりとは裏腹、光沢スーツに包まれ

た巨乳は、淫気の影響で恥知らずなほどに感度を増してしまっていた。そんな弱点をカップの形が変わるほどの強さで揉み潰され、たまらず屈辱の嬌声を挙げてしまう少女忍者。快楽を隠しきれない艶貌を、大量の媚薬粘液を滴らせた肉舌にべろんっ、と舐め上げられ、ゾクゾクとマゾヒスティックな快感が加速する。

（うあ……こ、こんな！ 淫気が濃厚すぎるわ……こんな状況で責められ続けたら、い、いくらあたしでも……耐えられない……！）

「くう……や、やめなさい……くひい、ひいんっ！ やあ、そ、そっちは……いやあ、そんな太いの……い、挿入るな……あああつ！」

いやいやと長髪を振り乱して拒絶するも、そんな抵抗は淫魔の嗜虐心を滾らせるのみ。自身の腕ほどもある極太肉塊が、スーツを押し込みながら秘唇にまでズボズボと挿入されていく。

「ひうっ、ぐう、ん、んあああああつ！ ぬ、抜いてえ……んあああつ入ってくるう、ふ、太いの……いやああ、こんなあ、ス、スー

ツごと挿入なんて……えええっ！」

ずぶっ、にじゅっ、ずぼっずぼっずぼっ！ ラバースーツの反発をむしろ楽しむように、リズムカルに抽送を繰り返す極太触手。聖別された生地は力任せの挿入にも破れることはなかったが、姫丸にとつてはむしろそれがきつかった。

引き伸ばされたラバースーツの裏生地にヌルヌルと秘粘膜を擦られるフェティッシュな感触に、コンドームのようにスーツを纏った触手挿入のキツさ。自らの愛液や汗で蒸れたラバー質な裏生地にぬちやぬちやと秘粘膜を摩擦されるのは、そのまま肉棒を挿入されるよりもずっと心地よくて——

「ひああ、あ、あ、ああっ！ イ、イクッ……嘘っ、こ、このあたしが……ふああ、あ、ああっ！ こ、こんな簡単にイカされちゃうなんて……挿入だけでイカされちゃうなんて……ええうっ！」

触手愛撫を続けられる女体が、ビクビクと気持ちよさそうに痙攣する。淫気の影響で発情しきった肉体は、スーツごとの触手挿入だけで、あつけなく絶頂を極めさせられてしまったのだ。



「うああっ……こ、こんな……嘘よ。あたしの身体……こ、こんなに敏感になっちゃってるなんて。これじゃ……こ、このままじゃ……！」
アクメの余韻を振り切れないまま、恐怖とともに湧き上がる期待感に、ゾクゾクと身悶える淫乱忍者。彼女自身よくわかつていないのだと。この程度の責めでは、淫魔の欲望は僅かにも満たされていないのだと。
今も絶頂の余韻でヒクつく膣内では極太触手が激しく蠢き続け、コスチューム越しにピンと乳首を浮かせてしまっている発情乳房は、形が変わるほどの強さで揉み込まれている。さらにはそれぞれの触手がビクビクと痙攣し、大量の発情粘液を射精しながらの勢いでぶちまけてきた。

「や、や、ああんっ！ そんなつ、汚いの出さないで……はああんっ
熱い、ドビュドビュしながらズボズボだめえ……ひあああっスーッ
引っ張られて……きついっ、すごい、これだめえ、また、またイク
……ううう！」

限界まで引き伸ばされたラバー生地がピツチリと膣粘膜に擦りつけられ、フェティッシュな感触に発情乳肉を締めあげられる。極薄の生地越しにドビュドビュと大量の白濁をぶっかけられ、またしても絶頂へと飛ばされる敗辱のくノ一。絶頂と同時に濃厚極まる発情粘液が全身にぶっかけられ、限界点を越えたラバースーツがビチツビチツと軋み上げる。

「！だ、ダメッ……い、今スーツ破れちゃったら……直接犯されちゃったら……こんなスゴイの、膣内に出されちゃったら……あ……！」
ゾクゾクと駆け巡る、マゾヒスティックな期待感。
破滅の時は、もう、すぐそこにまで——

※ ※ ※
「うあああっ……あ、ツク。う、うあ……ああ……」

数時間後——
淫魔による陵辱は休む間もなく続けられ、極めた絶頂の数は百以上。退魔スーツは見るも無惨に引き裂かれ、破れ目からは乳首や秘唇が露わに晒されてしまっている。ゴポゴポと音を立てて白濁を逆流させる

肉穴や、そこから覗く充血した秘粘膜、また恥知らずなほどに勃起しきった乳首や艶かしく赤らんだ乳肉を見れば、姫丸がどれほど激しい陵辱を受けてきたのかは瞭然だ。

「う、うあ……あ。ああ……は、あ……あ……」

聖衣の護りなく淫気の影響を受け、また胎内にも容赦なく中出しを何十発と極められて、もはや姫丸の理性は崩壊寸前だった。生意気そのものだった強気な美貌は悩ましく蕩け、舌を突き出したままの唇からはだらしなく唾液が溢れている。びっしりと塗りつけられた白濁粘液の白化粧が、あさましいアへ顔に恥ずかしいほどに似合っていた。

「う……あ、ああ。こんな……こ、このあたしが……こんなバケモノなんかに……好きなようにされて……玩具みたいに、犯されて……！」

快楽に潤む瞳の奥、屈辱と慚愧の炎が揺らめく。

「く、屈辱だわ……許せない。お、覚えてなさいよ……あんたたちなんか、す、すぐにでも……あたしの忍術で、ぶっ殺して……！」

もはや働かない思考でも、強気な抵抗の言葉を無意識のうちに吐き捨てる。淫魔相手にこれほどまでに鬨り犯されながら、それでもなお敵意と殺意を捨てない——たとえ無意識の反応であつたとしても、くノ一の精神力は脅威的だった。

だが——

「う……あ、ああ。あ……ああ……いや、あ、あああ……！」
ずる、ずる、ずる……

再び無数の触手が、音を立てて少女へと迫る。

「う、あ……ああ。来る……ま、また犯される。これ以上されたら……い、いくらあたしでも……も、もう……もう……！」

いくら強気を取り繕つても、心も身体もとうに限界を越えているのだ。

淫魔の陵辱を前に、果たして、いつまで正気を保っていられるのか——それは姫丸本人すら、定かではなかった。



逃れようのない魔悦のループ。囚われのくノ一は、いつ果てるともない無限アナル絶頂地獄でイキ続けるのだった――

流用で催眠トラップにひっかかった姫丸ちゃん。
今回珍しくスーツを破ってしまいましたが……
やっぱり破ってない状態の方が良いな！
来年もぴっちりスーツと地下水路をやって
いく所存……

それでは失礼いたします。

■奥付■

被魔忍 姫丸

2019年 8月11日 2版発行

○発行

Radical Dream

HP URL <http://www.rindou.sakura.ne.jp>

twitter : rindou2902

E-mail rindou@rindou.sakura.ne.jp

○著者

イラスト：竜胆

文：黒井弘騎

○印刷会社



SUN GROUP

<http://www.sungroup.co.jp/>

株式会社サングループ

●18歳未満の購入。閲覧を禁止いたします。

●無断複製および無断転載を禁じます。

